

新刊紹介

蓮如上人研究

宗學研究特輯號

一

蓮如上人に關する研究は、其の教義的方面と云はず、歴史的方面と云はず、極めて夥しい。特に最近テキスト等に關しても南條博士監修の「蓮如上人(王晋を魁として、禿氏教授の「御文全集」あり、尙稻葉昌丸師の「蓮如上人御文の蒐集及び五帖御文編輯に就いて(本誌十二ノ四・十三ノ一)並に、同師の精密なる「蓮如上人行實」等が公にせられて、此の方面の研究はほとんど完全の域に達したと云つてもよいであらう。

然しながら、未だ蓮如上人に就いて、各方面から之を組織的に研究した文獻は、東西を通じてほとんど之を見ることが出来ない云ふことは、宗學界に於ける遺憾の大きな一つであつた。なぜならば、宗學の組織も、實際に就いて、「蓮師」を除外しては、實質に、眞宗教義の全般を或る意味に於て理解したとは考へられぬと云ふ事が當然の事とて是認せられて居りながら、「蓮師」其人に就いて、之を組織し得なかつたことは、如何にしても之を首肯することが出来ないからである。

新刊紹介

二

斯くて、此點をねらつたのが、「本輯」の出現した唯一の理由ではなからうか。然かも、「本輯」が、研究雜誌の特輯號であると云ふめぐまれた立場と、「宗學院」の背景によつて、容易に各方面から、「宗學界」の重鎮の説を多く集め得て、綜合集成せる勞作は雜誌類としては、稀にみる大部のものであつて、本書の公にされたことは、體に上人研究に關する今後に於ける基礎的な規準と方向とを指示したものととして、稱讃されてよいと思ふ。

今、其の内容を目次の列舉に添へて、簡単に紹介するならば次の如くである。

(一) 蓮如上人教義の大綱 齋藤唯信師

筆者は、先づ眞宗に於ける中興上人の位置より筆を起して、其の傳記、著述を列舉し、(一)其の教義に及んで「上人の弘め給ふ教義の大綱を案するに破邪と顯正の二方面がある。」とし、通常破邪には、對外的と、對內的の二面があるものであるが、蓮師の場合には、主として對內的の破邪が、其の中心であつたことを擧げて、此所に其文證を「御文」の内に求め、「之を要するに、蓮師は一條の衰頹を歎かれ、如何にして之が再興を計らんと日夜苦慮せられ、其一方法として、當時我が一流の法義を聽聞しつゝ、ある門徒の中にも、心得誤るものあるに對して、其異計をあげさせられ、隨時に破斥されたもの」と述べてゐる。

(二)而して、顯正の方面に至つては總、別の二方面ありとし、總は「祖師聖人の勸め給ふ所の信心爲本の教義を勸められた

もの、乃至然して其教義を如何に説かせらるゝかと云へば、難行を捨て、後生助けたまへと彌陀をたのめ、と勧めさせられた」ことであり、之を宗祖の「本典」の内容と對照するときには「六卷の中初の五卷即ち教行信證と眞佛土の前五卷は、彌陀をたのむ一語に歸するのであつて、余の一巻即ち化身土巻は難行をすてると一語に歸して」兩者此處に符合する。(三)而して、之を別して大綱づける時は、信心正因、稱名報恩、師德感謝、法度遵守の四ヶ條に歸するので、之を領納せば、安心、報謝、師德、法度の四となり、一訓を示せば「改悔文」の「モロ／＼ノ難行難修自力ノコ、ロヲフリスデ、一心ニ阿彌陀如來、我等カ今度ノ一大事ノ後生御タスケサフラヘトタノミマウシテ候」とあるは安心、「タノム一念ノトキ、往生一定御タスケ治定ト存シ、コノウヘノ稱名ハ御恩報謝トヨロコビマウシ候」とあるは報謝、「コノ御コトハリ聽聞マウシラケサフラフコト、御開山聖人御出世ノ御恩、次第相承ノ善智識ノアサカラザル御勸化ノ御恩トアリガタク存シ候」とあるは師德、「コノウエハ定メオカセラル、御掟一期ヲカギリマモリマウスベク候」が法度であると云ふのである。(四)最後に筆者は、「蓮師として看過してはならぬこと」として、信後の道味が唇舌の間に迸り出された上人の教訓辭に及び、(五)宗教と道徳との關係に及んで筆を擱いてゐる。

(二)御文に表はれたる神祇觀 河野 法雲師

筆者には「眞宗の神祇觀」等の著述あり、神祇觀に就いて造詣深い師が、此處に蓮如のそれを論攷せられたことは其の題目の

みで内容を暗示するに充分であらう。即ち「今蓮如上人の上に於て神祇佛陀の關係を見て行くにはたゞ蓮師に限らず、遡つて宗祖並びに列祖に通じて之を見て、而して蓮師に及ばねばならぬ。」とし、總論には正しく「眞宗の神祇觀は凡て宗祖を原皆本地垂迹説を以てし、即ち佛陀を本地とし神祇を垂迹として、而もこの二、一體不離として共に攝化利生の方便として本迹隱顯種々に形を現し、結縁和光遂に以て師道に引入せしめ給ふ」趣を述べ、蓮師の之れに對する態度は「古來稱し來る本迹説がその儘採用せられ、一向專念の眞宗でありながら、一面には強ちに神祇を排斥せず、彌陀一佛の信仰でありながら亦敬神思想を喚起して敢て宗義に低觸せざることを示すが主眼なり」とて御文「二帖十」、「三帖十三」等の例をあげて考察し、結論に及んで「かく論じ來れば、蓮師の御文より見る時の神祇は飽くまで本迹説に則りこの教示なれば眞宗の法たるものは假令現今の神佛判然の時代と雖も、些かも顧慮する所なく、又神社結合が道徳的の神たると宗教の神たるを問はず、吾人は依然として列祖の指訓を守つて權社たる正神に對する時は、常に本迹の觀念を以て拜すべきである」と告白してゐる。

(三)御文と六要鈔との交涉 上杉 文秀師

本誌の初號から「御文研究」を執筆せらるゝ筆者が當然此處に至らねばならなかつたと告白して、特に「平常より懷抱せる佛心凡心一體、機法一體の相承が、それが實に『六要鈔』より出づることを論じたい」と、其序に記して、本論に向つてゐる。本論

は一、概論、二別論よりなり、概論とは「機法一體は『御文』に向ふ處、佛凡一體は二ヶ處なること誰の人もよく知る處。そして何れにも『トイヘルハコノコロナリ』とあつて、歸命の釋や發願廻向の通常の釋體とは異なる處がある。」と、それが「必ずその相承したまふ所、指したまふ所のあることを示し、是れ實に今の研究せんとする所である。と述べて、別論に及び初めに④「機法一體の名の源流」を論じて、「安心決定鈔」より出づる其語が、「願々鈔」を経て「六要」が言南無者に會合せる、「而かもその相承を守りて明日にされた」が「御文」であることを示し、次に⑤「義の出據と相承」を語り、其の出據が宗祖を通じて、曇鸞善導二師にあり、⑥從つてそこに「義脉の分流」が必然的に考察され、⑦その「結要」に及んで、「實は機法一體の義趣は曇鸞善導に出でて、その義は宗祖の他力眞宗の如實修行の念佛成佛義を顯示したまふことである。よりてその義脈を尋ねれば機法一體の名は元は西山義に出でたれども之を他力眞宗の義を顯はす爲に用ひられたるは覺如上人にして、亦それを承けて立教開示の「教行信證」の上にその義の蘊在せることを記し附けられたるは存覺上人の「六要鈔」である。かくて之を愚俗の者に對し易く正しく知らしむる爲にとて、既に當時の教界に流行せる機法一體の美名に迷はされんを恐れて、却て敵馬に乗じて敵を撃つ方法に出でて、その美名を宗義に取倣して宣傳したまふが蓮如上人の「御文である」としてゐる。而して次に⑧蓮如上人の勸化を再吟味して、最後に本論の主點たる⑨「六要鈔との交渉」を

眺め、機法一體に就いて「阿彌陀佛攝取不捨の意を以て釋するは「願々鈔」の相承であるが、言爾言者に配するは「六要」の「信行不離機法は一」(一ノ九)、「行信能所機法一也」(二ノ七九)、「既歸佛願、機法一體能所不二自有不行而行之理」(四ノ一九)を受けることなるを摘示してゐられる。尙筆者は最後に「佛凡一體に就いては別著」是心作佛是佛の研究」に譲つて之を省略してゐる。

(四) 蓮如上人の婦人觀 大須賀 秀道師

筆者の言によると、「これは從來の宗學に見出されない新たな研究題目で、殊に婦人觀といふ近代に於ける普遍的な用語がわが宗學の特殊の立場から如何に理解せらるべきかといふことは、この問題を取扱ふについて、豫め慎重の考慮を要する」と述べて、「若し蓮如上人に婦人觀といふやうなものがあつたとすれば、それは眞宗の信仰に統一された女性に對する觀方であくてはならぬ」と注意し、つ從て、其れは「眞宗の立場から言へば、如何なる觀方でもそれが個性から發生するは、即ち定散諸機各別の自力觀である」から、「少くも既に蓮如上人の婦人觀といへば、それは師の教化の上に表現せられてゐる婦人觀のこと」で、「教化の語に現れたものであれば、蓮如上人の婦人觀は即ち親鸞聖人の婦人觀であり、親鸞聖人の婦人觀は即ち善導法然の婦人觀に外ならず、その善導法然の婦人觀といふもまた其源に遡れば、全く彌陀如來の本願に於ける婦人觀に外ならぬと看做され得る」として、第三十五の別願と、韋提の得忍より眞宗の御文に至る傳統を示し、女人教化について蓮師の思想を

考察する原因の批判を行つて、此れを「御文」に限定し、専ら女子に對する教化の御文は八十通の中、「四の一〇」、「五の三、七、十四、十七、十九、二十」であるとしてこれをあげ又特に男子に對しての御文なきに、斯くの如く特に女子に對するものあるは本願に性の差別を認めるかと云ふ疑問に對して、「一の二」、「二の七、十三」、「五の二」を示し、その本願の内容に差別なきを示す「二の十、十五」「五の一、二、四」等を擧げてゐる。而して此の意味を検討すると「蓮師は、大悲平等の願心から、男女に差別を見ないばかりか、これを一系列に罪惡深重の線上に歩いて、勲々地々の救済を勸諭せられた。それ故に専ら男子を對象とする教化のないのも、恐らく十方衆生の上より男女を差別せざるが爲であつて、この立場から見れば、専ら女人に約せる「御文」といふも、それは罪深き衆生の代表として女人を立たしめたものであること、彼の草提が『觀經』に於ける對告衆であつたと同一である」として「五ノ二」を擧げてゐる。而して後、宗學の立場から之を研尋して、其の説を補ひ、最後に、「宗祖が『教行信證』に別に第三十五願を取り立て開顯せられなかつたやうに、『御文』にあつても女人往生の別願として第三十五願を出してゐられないことは特に注意に値する」と結んでゐる。

(五) 蓮如上人の宿善觀 加藤 智學師

蓮如上人の宿善觀は、覺師のこれを受けて、其の「五重義」を構成する重要な研究題目である。筆者は、此れに對して、極めて敬虔の態度で筆を起し、先づ次に上人の宿善と光明と名號の

關係に就いて次の如きを認めてゐる。

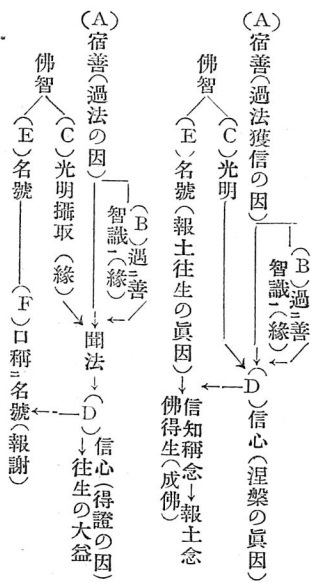
獲信の因緣 { 宿善 (聞信の因) } → 聞名執持 (獲信)
得證の因緣 { 光明 (持名の緣) } → 念佛往生 (得證)
名號 (往生の因)

而して次に宿善宿緣により善智識に遇ひ正法を受くる者、即ち宿善の内因と善智識の外緣による聞名獲信に就いて、二重の因果を示し、

(A) 宿善 (過法の因) — (B) 遇善智識 (聞正法)

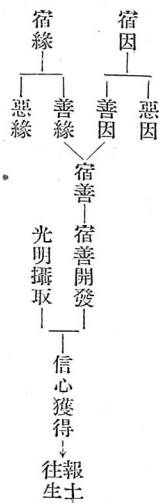
(A) 宿善 (獲信の因) — (B) 善智識 (緣) — (C) 佛力 (緣) — (D) 獲信心 (住正定聚)

となしてゐる。而して、次に「口傳鈔」、「見聞集」によると、此處に相承された五重の義を概觀し、次の如く示してゐる。即ち兩者を比較すれば、



となる。

筆者は更に細論を進め、宿善と宿因、宿縁の關係に及び、之



と論じ、更に其の據を求め、再論して大系を統一し稿を結むでゐる。上人の教義を知る好個の指南であらう。

尙本輯には、以下に示すが如き、宗學院同人の力作があり、之れも紹介の筆を進めたいと思ふが紹介としては餘り長きに關するため、其の題目のみを掲げることゝ止めやう。報恩の稱名に就いて「徳永義統氏」「述師時代に於ける無信稱名説」「高柳恒榮氏」「王法爲本に就いて」「稻葉秀賢氏」「述師無常の化凡に就いて」「石崎達二氏」「御文の六字釋」「野村憲成氏」「御文に現はれたる祕事法門と祕事がましき法門」序章二氏等がある。

尙特殊研究として、精細を極め、御文研究の上の不朽の基礎をなすと考へてよい稻葉昌九師の「蓮如上人御文目錄」が、光彩をはなつてゐる。其他に禿氏祐詳師の「蓮如上人の筆蹟」、佐々木芳雄氏の「蓮如上人開創の寺院」、光本寛隆氏の「御文流布本考」最後に、岡崎正謙師の「蓮如上人撰述書目解説」があり、上人研究の集大成として、學徒の一本を備ふべき者であること無疑はない。(菊版五一三頁大谷派本願寺宗學院内、宗學研究會發行、價貳圓五拾錢)(禿)

真宗要目五十題講述

住田智見校訂

此の著の著者は、本「講述」の目的に關して、其の「序」に次の如く述べてゐる。「先づこの五十題は、説教の用心に設くるところにして、總て僧侶は自行化他を行とするものなれば、説教を要とせずんばあるべからず。その法を説くに付いては、先づその所説の法を明かにせずんばあるべからず、その法門を明かに知らんと欲せば、先づ學行を勉勵せずんばあるべからず。然るに動もすれば、たゞ己が學力をもつて聖教をよみ、相傳もなきえせ法門を主張して、人をもまどはし、我身も惡見に住し、眞宗の法流をけがし、其々に墮獄の業を結ぶ風情のやから、世間にも多きことのために、習練場が設けられたるを機會に、當今僧侶の急務とすべきは此の五十の論目なり」として、三經七祖宗祖より述師に至るまで、通じて講述せるものである。校訂者が、今圓之を梓に上した理由の第一も此の點にあるのであるが、即ち其の理由を更に検討するならば、我派に於ては、初代講師光遠院惠空の「鄧林集」を最初として、近く雲討院神興講師の種々の「論草」眞成院千巖、冷香院潜龍、一乘院覺壽等の諸師の「論題」など、決して「論題集」には事缺かないのであるが、今日の如く、三經から述師までに就いて、論述されたものが稀であると云ふことである。此の事は著者も其の「序」に述べ

てゐるが、本書の更に特徴とする所は、其の宗學に對する著者自からの態度に見なければならぬであらう。即ち本書の目的が元來布教者としての僧侶を相手とする「講述」であるから純學究的のものではないが、校訂者が、本書を以て、尙「志學者の指針たるや疑ふべからず」となせる點も實は此の態度にあるもの、如く、其れに就いて、著者の語を借りるならば、説教者の任務に就いて次の如く述べてゐることである。即ち『すべて佛道修行は自利々他の二門の外はあるべからず。この自利々他は一雙不離なるものなれども、自利成ぜずして他を利すべからず故に他を利せんと欲せんものは、先づ自利を成ずべし。その自を利することは學にあり。その他を利せんとするものは教にあり。この「學」と「教」とは亦一具にして相離れざるものにして、

教を師にうけ之を學び、學んでその功成ずるときは、復人に教ゆ。學而不厭。教而不誤。つめに聖賢の徳を成ずること掌を指すが如くなるべし。然れば學は本なり。教は末なり。是を以て人を教へんと欲するものは、先づ我自行の學を勉強すべし。その學に二種あり。一には解學。二には行學。その中、行學尤難しとす。故に南山詳師も非解者多非行者少と歎じたまへり。已に外典にも學道不能行者爲之病とありて、人學んで之を行ふこと能はずんばこれ必ず名利勝他の病者と云ふべし。死者と云ふべし。故に我眞宗にあつては自信教人信と教へたまひて已に信なくして人をすゝむるものは、眞宗の病者と云ふべし、死者と云ふべし。解學は眼の如く、行學は足の如く。いかに眼

は明かなりとも足にあらざれば、いきたるとしるに至るべからず。又足はいかほど達者にても眼にあらざれば、一步も進むこと能はず。故に解學行學自足相資けて自ら學び、自ら行ひ、又人を教へ、人をして行はしむるをもつて學成の功と可謂」と述べてゐる。

而して次に「説教者」の資格に就いて「之を推功歸本」すれば法身如來なり。然れども見聞覺知して解を生ぜしむるものは報化の二身なり。今此娑婆界にありては、釋迦善逝をもて三界の大教導師と仰ぎ奉るとき、此佛の説法に就きて、二種あり」となし、此所に「玄義不釋名門」^三左の「佛説」の説の字に就いて、

「言説者々音陳唱故名爲説。又如來對機説法多種不同。漸頓隨宜。隱彰有異。或六根通説。相好亦然。應念隨緣。皆蒙證益也」と釋せるを拉し來り、觀經華座觀に關する、善導の廢立と、我祖の隱顯に之を説明會通し、其の自重すべき要職なることを示し、「爾れば説教を職務とするものは、たゞ聲の屈曲をもて巧拙を論すべからず。常に行狀威儀を正しくして、聽者をして恭敬尊重の思ひをなせしむべし。それは何故なれば説教者の根本は三界の導師釋迦善逝、そして釋導の説教を相承し給ふが三國の列祖。我眞宗にありては祖師聖人次第相承の善智識。その善智識の代理を勤める教導職なれば、威儀を尊重にして獅子王のをもひをなし、苟くも説教上に於て雜談戲話をなすべからず」等と種々の注意を述べて、此所に宗意の研究を強調して本書の端を開いてゐる。校訂者のその人を得たるによりても、其の内

容を窺ひ知り得べく、教義と實際との交渉を中心とした點、眞宗僧侶の一本を備して、座右に銘すべきものたるを疑はない、これ故て本書を薦むる所以である。

尙本書は、此の他に對外的に、他人の説を是せんとする意趣のあることを見逃してはならない。即ちこれに依りて本書の教義の精細を失せぬ一面の理由も知られるであらうが、校訂者の言によると、それは直接大乘院岡崎正純贈嗣講の「眞宗要目五十題略述」を指せるもの、如く、此れに就いて、岡崎師は「辨妄」一卷を後に著してゐる。即ち岡崎師は、眞宗要目五十題を説教略辯集附録」として、明治十三年二月より六回に亘りて刊行され、行忠師は同十四年十二月十三日、此の「講述」に開講されたもので、岡崎師の「辨妄」は、附言に明治十八年と酉立春識すと記し、同二十年十一月刻成る旨奥附に見えてゐる。前の「略述」も今は合冊となり「辨妄」と共に法藏館より出版せられてゐるが、その中間の本書が寫傳のまゝになつて居ることなげいて今回上梓せられたのが校訂者の意圖の一部である。

因に著者は、校訂者が「眞宗大學校専門本科」在學中の恩師にして、文化十四丁丑年生、明治二十三御寅年寂、越後無爲信寺の住にして、姓武田、眞無量院嚴如上人より莊嚴光院現如上人へ御讓職ありし吉辰を以て講師職を拜命せられてゐる。著述頗る多し。

尙、「本書」は四卷よりなり、内容目次は次の如くである。

「卷一」、「序」、(一)出世本懷、(二)教宗教體、(三)選擇淨土

(四)六八大綱、(五)十八成就、(六)永劫修相、(七)五善五惡、(八)順逆二緣、(九)別選所求、(一〇)草提得忍

「卷二」、「序」、(一一)九品唯凡、(一二)下品往生、(一三)廢立爲正、(一四)教頓機漸、(一五)彌陀名義、(一六)執持名號、(一七)護念不退、(一八)二雙四重、(一九)因力果力、(二〇)要弘二門

「卷三」、(二一)「入出名義、(二二)自利々他、(二三)能所機法、(二四)行信一念、(二五)往還他力、(二六)三問答、(二七)二河喻顯、(二八)信疑勸誠、(二九)眞假分別、(三〇)信心論性、(三一)難易二道、(三二)一心歸命

「卷四」(三三)三不三信、(三四)聖淨二門、(三五)正雜二門(三六)三種信知、(三七)專雜得無、(三八)宗名具略、(三九)三時興廢、(四〇)願作度生、(四一)正業正因、(四二)橫超名義、(四三)光明名號、(四四)報化二土、(四五)光爲佛身、(四六)信歸同異、(四七)機法一體、(四八)佛心凡心、(四九)願行具足、(五〇)攝抑二門、已上。(菊版三〇五頁 發行所 京都法藏館 價貳圓半)(禿)